

律法か福音か / エルサレム会議

パウロとバルナバは長期にわたる第一次伝道旅行を終え、シリアのアンティオキアに帰ってきた。彼らは到着早々、教会の人々を呼び集めて、神が彼らを通して各地でして下さった異邦人伝道の成果を感謝をもって報告した。アンティオキアの教会は大きな喜びに満たされたことであろう。パウロとバルナバは引き続きアンティオキアにとどまり、その働きを続けて行った。

ところが、そこで重大な出来事が起こった。それは、エルサレム教会から来た或る人たち、すなわち、ユダヤ教の伝統に依然として固執していた教会内のユダヤ主義者たちが、アンティオキアにやって来て、異邦人もモーセの慣例に従って律法を守り、割礼を受けなければ救われないと強力に主張したのである。このことは、異邦人が大部分を占めていたアンティオキア教会に動揺を引き起こした。そこで、パウロ、バルナバとこれらユダヤ主義者との間に激しい対立と論争が起こったので、エルサレムに上ってこの問題を協議することになった。

こうして最初の教会会議、即ちエルサレム会議が開かれた。パリサイ派から信仰に入ってきた人たちを中心とするユダヤ主義者たちは、異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきであると主張した。これに対してパウロとバルナバは「瞬時も彼らの強要に屈せず」(ガラテヤ 2:5、口語訳) 人は皆、ユダヤ人も異邦人も区別なく、神の前に罪を負った存在であり、律法の行ないによっては決して義とされず、ただ罪の贖いを成し遂げて下さった主イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われる、という福音の真髄を強力に擁護していった。

激しい論争があった後、使徒ペトロが立ち、異邦人コルネリウスの回心と救いの出来事を思い起こすように促し、言った、「兄弟たち、ご存知のとおりずっと以前に、神はあなたがたの間でわたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった轡(くびき)を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」(7-11節)

使徒ペトロのこの強力な援護射撃の前に、反対派は黙ってしまった。最後に、会議は、長老ヤコブの提案を受け入れ、異邦人は異邦人のまま主にある兄弟たちとしてそのまま受け入れること、ただし、異邦人キリスト者たちが、各地に散在するユダヤ人たちの宗教感情を十分考慮し、ユダヤ人たちの宗教的伝統や習慣に抵触するようなことを出来るだけ避けるように、との書簡を異邦人諸教会に送ることに決議した。

エルサレム会議は、福音の真理を守るための最初の公的な戦いであつてよい。人が神の前に義とされ救われるのは、いかなる意味でも律法の行ない、即ち、人間の努力や功績によるのではなく、十字架で罪の贖いを成し遂げて下さったキリストイエスを信じる信仰による――この偉大な福音の真理が確立されるための大切な戦いだったのである。